血液内科

（スタッフ）

部長　　：大塚　英一（外来化学療法室室長）
部長（輸血部）：宮﨑　泰彦
主任医師　　：佐分利　益穂
　　：高田　寛之
嘱託医　　：坂田　真規

血液内科は大塚英一血液内科部部長、宮﨑泰彦輸血部部長、佐分利益穂医師、高田寛之医師、坂田真規医師の５名が担当しました。病床数は35床（６階東病棟:21床、６階西病棟：14床）で、無菌病室として使用できる病床が15床あります。県内の血液内科診療病院や各地区の拠点病院、開業医の先生方と連携協力しながら血液疾患の診療に従事しています。急性白血病、悪性リンパ腫、多発性骨髄腫などの造血器腫瘍に対して強力化学療法や造血幹細胞移植、あるいは新規薬剤（分子標的薬など）を併用した化学療法を実施しました。また、再生不良性貧血、自己免疫性溶血性貧血、免疫性血小板減少症などの血液疾患の治療も行いました。外来看護師は江藤真理子、阿南直美の２名が勤務し、６階東西の病棟と柔軟に連携を取りながら診療をサポートしています。

（診療実績）

2021年に新規に入院治療を行った造血器腫瘍患者数（表）は、急性骨髄性白血病11名、急性リンパ性白血病４名、慢性骨髄性白血病６名、骨髄異形成症候群10名、悪性リンパ腫65名（びまん性大細胞型Ｂ細胞リンパ腫34名、濾胞性リンパ腫８名、その他のＢ細胞リンパ腫10名、成人Ｔ細胞白血病／リンパ腫９名、その他のＴ細胞リンパ腫１名、ホジキンリンパ腫３名）、多発性骨髄腫10名、その他の造血器腫瘍が10名でした。非腫瘍性疾患では再生不良性貧血６名、自己免疫性溶血性貧血２名、免疫性血小板減少症２名、その他の疾患８名でした。新規の外来受診患者は大半が他院からの紹介あるいは健診異常で、貧血を中心に各血球の異常、リンパ節腫大、不明熱、出血傾向などであり、新規患者の年間総数は733名（43～76名／月、平均61.1名／月）でした。造血幹細胞移植の実施件数ですが、同種移植は20件（血縁者間移植が５件：骨髄０件、末梢血５件、非血縁者間移植が15件:骨髄７件、末梢血２件、臍帯血６件）で、自家末梢血幹細胞移植は５件でした（図）。血縁者間移植５件のうち HLA 半合致のハプロ移植が３件でした。外来化学療法室での通院による化学療法も積極的に行っています。悪性リンパ腫や多発性骨髄腫に対する化学療法は、原則として２コース目以降は外来で実施しており、１年間で合計1,366件（2020年：1,173件）の化学療法を外来化学療法室で実施しました。

（研修・教育）

初期研修医として西川匠、黒坂一輝、蔭山徹、古屋伶樹、上野愛実、伊藤はるか、佐藤美歩、福田貴仁、丸山莉果の９名が血液内科研修を行いました。

（今後の方向性）

造血器腫瘍に対する治療薬は最近５年間で約20種類の新薬が薬価収載され、今後も新たな治療法の登場が想定されています。特に免疫療法の進歩はめざましく、抗体医薬は抗体薬物複合体や二重特異性Ｔ細胞誘導（BiTE）抗体などの進化を遂げていて、さらにキメラ抗原受容体発現Ｔ細胞（CAR-T）療法が導入され、血液疾患に対する治療の多様性はさらに高まっています。薬物療法と造血幹細胞移植の進歩により難治性血液疾患の治療成績は向上し、長期サバイバーが増加しています。それに伴い、晩期合併症への対応が重要な課題となり、治療終了後の社会的自己表現の達成を支援する体制づくりが要求されています。適正な最新医療の提供に努め、他職種と協力して長期フォローアップ体制の確立に取り組み、常に血液疾患診療の質の向上を目指していきます。また、社会生活を送りながら外来で化学療法を実施していく件数は増加しており、各地域の中核病院や開業医の先生方との連携をさらに深めていきます。

新型コロナウイルス感染症は全世界に急速に広まり、本邦においても増加していて、大規模な集団発生も報告されています。特に血液疾患患者の場合、発症すると短期間に重篤化、致死的になる可能性が高いとされており、徹底した感染対策を継続的に講じていきます。

（文責：大塚英一）

表　造血器腫瘍の年次別新規入院患者数

（単位：人）

	2017年	2018年	2019年	2020年	2021年
急性白血病	23	14	21	25	15
骨髄異形成症候群	13	5	4	13	10
骨髄増殖性腫瘍	8	2	2	6	7
悪性リンパ腫	67	74	69	71	56
成人Ｔ細胞白血病	9	7	9	10	9
多発性骨髄腫	14	13	13	20	10
合計	134	115	118	145	107

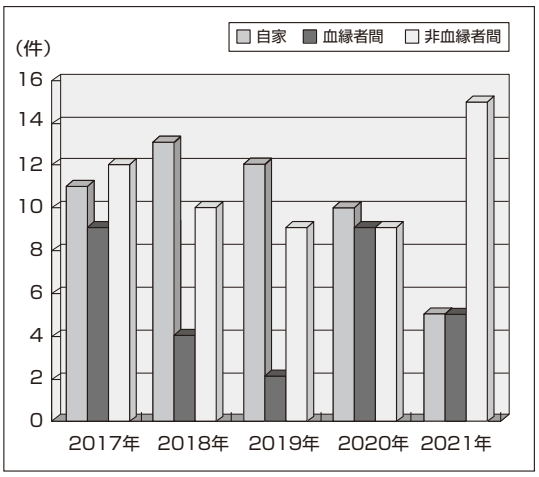

図　造血幹細胞移植内訳件数の推移